

東京日々新聞

七百八號



越後の國新潟の藝妓
今川屋雛と言ふ者

山々亭有
人

羨あら
宅容桃

極のどく艶ちりねど致と標と客と浮くもの妙
あまの其繁昌殆ど三味線の弾もさらけ是に於て

畜財千田ふ及べり然る雛小情郎ありて名と敦賀屋喜

右正門と呼び廿年來朝親と既ふ二女を生一長女の等しく

蘇妓さうはしも漆膠の中より共金の歌のせりらん敦喜一朝茶相場の

失策あり千有餘山の損とより夫を償えん為め窃ふらの畜財と持出さるる雛の夢よふまらばはやく

間浮陀金の開帳とふふと筆筒の引出しを明くは光明何まに光りと放ちて影と止むは是必竟

敦喜の野為からんと是と公に訴へんとせしむる若かりて其事よ至らざれば
遂よ為小病ひとあり又懇許あはれに快氣不至じとあり

萬齋芳幾



早見屋
渡辺彫栄

85
80
75
70
65
60
55
50
45
40